

正しい知識をもつこと

静岡県 引佐南部中学校 三年
溝尻 圭

夏期講習の帰り、僕はいつものようにバスを待っていた。バスが到着し乗車すると、運転手さんの「お客様、大丈夫ですか?」という声が聞こえてきた。どうやら、おじいさんがバスを降りるときに転んだようで、運転手さんと近くにいた乗客二人が、おじいさんを助けていた。

僕は、(何かできることはないかな)と思ったが、(自分が手伝ったら迷惑になるかな)とも思った。そう思いながら座っていると、バスの後ろからクラクションの音が聞こえてきた。

バスがずっと停車しているため、車の列ができ始めていたのだ。僕はいてもたってもいられなくなって、バスを降り、後ろ3台の車の運転手さんに歩道側から事情を話した。運転手さんは事情を理解してくれ、安全を確認したのち、バスの横を通り過ぎて行った。

バスに戻ると、おじいさんは歩道に横たわっており、運転手さんたちが手当を続けていた。おじいさんは転んだせいで、顔や腕から出血していた。僕は鞆の中にあったティッシュを運転手さんに手渡し、散乱していた荷物をまとめた。

ティッシュが足りなさそうなので、僕は塾まで走り、先生に事情を説明してボックスティッシュをもらって戻った。先生も後から来てくれた。

運転手さんがバス会社に電話をしていたので、代わりに僕は出血を止めようと傷口を押さえたり、声をかけたりした。早く血が止まればいいのと思うのと同時に、周りの人が手伝ってくれたら心強いのに、とも思った。

やがて救急車が到着し、救急隊の方々がおじいさんを救急車に乗せた。その後、僕は連絡先を聞かれたが、答えながらも疑問に思った。そして、おじいさんに乗せた救急車は病院へ向け出発し、バスは再び動き出した。降りるときに運転手さんから「ありがとう」と言われ、とても嬉しかった。

帰宅後、母に話をすると、とてもほめてくれた。そして、連絡先を聞かれたのは、感染症がある場合や後で状況の確認が必要となった場合のためだよ、と教えてくれた。あれから連絡がないため、安心すると同時に、おじいさんが回復しているといいなと思った。

僕は、以前所属していたボーイスカウトの活動や保健体育の授業で、救護の方法を学んでいた。だから、今回も血液に直接触れないよう注意したり、手当後に手洗いを行うなど行動することができた。

困っている人がいたら、自分ができる範囲で助けることはあたりまえのことだと思っていたが、今までの僕の経験や知識が「僕に何かできることはないかな」と、迷う気持ちを持つ僕の背中を押してくれたと思った。

正しい知識や技術をもっていると、相手を思う気持ちを行動として示すことができるのだと学んだ。今後も学校や生活の場面で、正しい知識や技術を身につけていきたいと思った。